

宮澤賢治を想う

37歳の誕生日。私は岩手県盛岡市にある光原社を訪れていました。宮澤賢治の生前唯一の童話集「注文の多い料理店」を出版した会社であり、また、その童話のモチーフとも言われています。何気なく一冊の本を手に取り、「アメニモマケズ、カゼニモマケズ、」と脳内で記憶が蘇ります。幼児教室で意味も分からずに暗唱していました。懐かしい思い出、当時の記憶が蘇り、ついつい関連資料にも関心が赴き、衝撃の事実を知ります。

宮澤賢治の実弟、宮澤清六が語るに、

「雨ニモマケズ」は、文学なんかじゃない。あれは、賢さんの『生きたい!!』という祈りの言葉だったんだ。

「わたしの宮沢賢治祖父・清六と「賢治さん」 清六の孫、宮沢和樹 著

「雨ニモマケズ」は宮澤賢治の遺作のメモだったのです。享年37歳。私がこれから過ごす1年

間は、宮澤賢治が生きたくて生きたくてたまらなかつた1年なのだ。全身が身震いし、何か大いなるものに圧倒される感覚に襲われました。

同時に、宮澤賢治が法華経の熱心な信者であったことを知ります。

賢治さんはこの「行く」ということをたいせつにしている、それをいつも口にしていたそうです。
〔わたしの宮沢賢治祖父・清六と「賢治さん」 清六の孫、宮沢和樹著〕

東西南北に「行ッテ」という表現が、お釈迦様が出家を決意する「四門出遊」と重なります。法華経は思想よりも菩薩業の「実践」を重んじる宗教であり、彼の「生きたい!!」という気持ちたるやいかほどか。

あれから1年が過ぎ、齢38になりました。老化は治る時代だからこそ、1年という歳月のありがたみ、重みを改めて噛み締めなくてはなりません。私には何が「実践」できるのかを自問自答する日々です。